The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	死に方との共生
Author(s)	山中, 浩司
Citation	未来共創. 2021, 8, p. 350-352
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/83915
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

エッセイ

死に方との共生

山中 浩司

未来共創センター招へい教授の石蔵文信先生のがんの話（本号346ページ）を伺ったとき、思わず私どもが10年間続けてきた『生き方死に方を考える社会フォーラム』について複雑な思いが走りました。フォーラムの世話人は、大村英昭、石蔵文信、伊藤公雄、阪本俊生と私の男性5名。皆で終末期医療の問題に取り組み始めた2010年、大村先生が末期がんという診断を受けました。その後、末期がんでありながら、一向に弱る気配のない大村先生を中心に、上野千鶴子、石飛幸三、中村仁一、久坂部羊、各先生を招きながら、5年間、「死」と共生する「生」について考えてきました。

2015年、末期がんを患うこと5年、無事大村先生は他界され、その後は残ったメンバーでやっています。今回の石蔵先生の話で、われわれ世話人5人のうち3人ががんに罹患（伊藤氏はサバイバーです）していることになり、ますます「死」が身近に感じられる状況になりました。思えば、男子5名が並んで「共同報告：ポスト工業社会における男性の健康」というタイトルで学会報告をしたのが2013年、その折に、「ああやって、男ばかりでやってるのねえ～」と親しみとも憐れみともとれる声をかけられたのがなぜか懐かしく思い出されます。

よくよく考えてみると、フォーラムを始めたときには伊藤氏ががんのサバイバー、すぐに大村氏の診断、弔いをしているうちに石蔵

大阪大学大学院人間科学研究科附属未来共創センター　センター長；yamanaka@hus.osaka-u.ac.jp

氏の診断と、ほぼずっと、「死」ととなり合わせで来たことがわかります。そして、こうした状況は昨今の日本では珍しくもなく、とりわけ私の世代（高度成長期生まれ）は、親を見送るのに忙しい間に、すでにひたひたと「死」の影が近寄っているのです。親の相続のことを考えていると、次の相続がもうすぐだということに気づくものです。このことは、昨年父が94歳で往生してようやく気づきました。私の父は90歳まで「自分は不死身である、死なない」と言っておりましたので、このことになかなか思い至らなかったのです。「不死身」である割には、父はしごく簡単に往生しましたので、変化はかなり唐突で、フォーラムなどをいくらやっていても、人間我がこととはなかなか思い至らないものだと思いました。

それで、ようやく私も、「死に方」と共生することを学ぶ必要があると思っています。フォーラムと並行して希少難病の当事者の方にお話を聞く調査を続けていますが、多くの方が、やはり「死」を真剣に考える経験をされています。そして不思議とみなさん、それを明るく話されます。そうした方々のお話を伺うことで、こちらは「生き方」を学ぶことが多く、「病」や「死」はなぜ人の生き方に深く関わるのかということを考えるようになりました。「病」や「死」というものがなければ、おそらくわれわれは他人を慈しんだり、助けたり、共に生きているという実感をもてないのではないかと今では考えています。私の父は「不死身」でしたから、人の言うことをほとんど聞きませんでした。しかし、病に倒れ、ようやく「ひょっとすると自分は不死身ではないのではないか、100歳くらいが限度ではないか」と思い始めてからは、「ありがとう」と口にし始めました（笑）。葬儀では、家族は大往生と満足でしたが、最期を看取っていただいた施設の方には涙ぐんでいただきました。私の脳裏には思わず「終わり良ければ」という文句が浮かびました。「終わり」がなければどうなっていたでしょうか。

昔読んだハイデッガーの哲学書には人は「終わりに向けられた存在」であると書かれていました。こういう思想は第二次大戦でさんざ

ん利用されましたので、戦後はタブーでしたが、超高齢社会になり、われわれも「死」と共生する生き方についてようやく冷静に考えられるようになったのだと思います。コロナ禍の中で、われわれはウィルスとの共生も考えないといけなくなり、また、病との共生も考えないといけません。いろいろなものが共生するというのは、言葉としては新しい響きがありますが、実は、太古の昔から、事実上われわれはさまざまなものと共生してきたので、そういうものがあたかもないかのように考えたり、振る舞ったりしてきたのは、戦後の高度成長期のほんのわずかな時間にすぎません。ウィルスや細菌と関係なく生きていた人類はいないはずです。その意味では、新しい日常ではなく、本来の日常に戻るだけで、夢から醒めただけとも言えます。父の「不死身」の夢も、その意味では高度成長期の日本のほんの一時期の夢であったかもしれません。今の若い人は、バブルがはじけて、経済がずっと下がっているのが日常ですから、案外とわれわれの世代よりもこのことをよく理解しているかもしれません。若者から学ぶことが共生や共創にとっても重要になるとも言えます。